

哲学カフェ in 有瀬：その由来と狙い

Café Philosophique in Arise : Its Origine and Aims

桑島 紳二 平光 哲朗 金 益見 福島あずさ 松井 吉康

(要約)

本学人文学部で開催されている哲学カフェは、勉学に対して受け身になりがちな学生達に「自ら考える」場を提供し、現代社会で求められる「自由な発想力」を伸ばしてもらうことを目的としている。本論はそうした狙いを示した上で、哲学カフェによってどのような教育的効果が期待できるかを共著者それぞれの視点から論じたものである。キャリア教育ではブレインストーミングの有効性が言われ、哲学教育では「自分の言葉を語る」ことが求められるが、哲学カフェはそれらを可能にするのであり、また大学での哲学カフェ開催はその敷居を下げることに貢献し、科学をテーマにすれば、科学者と非専門家が互いに意見を交換する場となりうるのである。

キーワード：哲学カフェ，問題発見能力，コミュニケーション能力，対話，教員ネットワーク

序

フランスで生まれた哲学カフェは、大学というアカデミズムの場から哲学を解放し、日常の中で生じる問題からダイレクトに哲学に踏み込もうとする企てである。元々は、街中のカフェで哲学的な議論をすることから始まった活動であるが、今回、本学人文学部人文学科の教員有志（本論の著者一同）¹が集まって、大学内で哲学カフェを定期的で開催することとなった。しかし、大学というアカデミズムの場から解き放たれたものを、再び大学内で行おうとするのはなぜか。この試みを進めるにあたってまず答えるべきは、この問いであろう。

最初に断っておかねばならないのは、私達が開催する哲学カフェは、大学のカリキュラムに組み込まれた「授業」ではない、ということである。この集まりでは、教員も学生も、義務や強制、さらには「単位のやり取り」といったものとは完全に無縁である。教員は皆ボランティア参加であり、学生も出席したからといって成績がプラスされるわけではない。会場は大学構内であるが、この集まりそのものは、大学の外で行うのと何ら変わらない。それなら学外で行えばよいとも言えるが、本計画が一番の狙いとするのは、本学学生に対する教育的効果なのである。そうした狙いは後述することとして、もう一点、この企ての目的となるのが、教員の相互理解の活性化である。前者は、近年の大学が抱える根本的な問題、つまり少なからぬ学生に見られる「問題発見能力の欠如」と直結しているのであり、後者は、総合大学という場所を持つ課題、つまり様々な分野の教員が集まっていることをどう活かしていくか、という課題と結びついているのである。

1 総論

1.1 哲学カフェの歴史

今日「哲学カフェ」と呼ばれるものは、1992年にパリで始められた試みに端を発している。その経緯は、その企てを始めたマルク・ソーテ（Marc Sautet）自身によって報告されているが、そこで重要なのは、哲学を学者の独占から解放しようとしたということである（ソーテ 1996）。哲学というものが、「大学で学ばれ、専門用語を駆使しなければできないもの」と考えられていたのは、その誕生の地であるヨーロッパにおいてもそうだったのである。では、そもそも「哲学」とはいかなるものなのか。

哲学は、古代ギリシャで生まれた営みである。それが誕生した当時、そこに専門用語は存在せず、また職業哲学者も存在しなかった。哲学史上最も偉大な哲学者の一人、ソクラテスは、職業哲学者ではなく、街中で若者をつかまえては議論をふっかける変わり者であった。しかも彼は、若者に対して教師のようにではなく、同じ問いに取り組む仲間であるかのように振る舞ったのである。そうしたソクラテスの営みを現代によみがえらせようとしたのが、ソーテである。彼の著作が『ソクラテスのカフェ（Un Café pour Socrate）』と題されたゆえんである。では、ソクラテスは若者をつかまえて何をしたのか。彼が行ったのは、常に「問いを立てる」ことであった²。彼は、問いを立てることで、問題となって

いた事柄を「吟味 (ἔλεγχος)」しようとしたのである。

哲学がこうした営みであるとする、それが専門家の独占物になること自体、おかしなことである。ソクラテスが哲学的対話の相手として選んだのが、教養ある大人達ではなく、若者達であったというのは、私達にとって重要である。私達の哲学カフェでも中核となるのは、学生達、若者だからである。私達の哲学カフェにおいても、教員は「教える者」ではないし、参加している者は全員、「自分で考えること」が求められる。一人の教員の発言に対して別の教員や学生が問いを發し、前者はそれに応答する。そうした積み重ねの中で、学生は、事柄の吟味の仕方を学んでいく。教員は、議論を整理したり、新たな問いを發したりすることはあっても、問いに対する答えを呈示したりはしない。基本はあくまでも学生に議論の先を意識させ、途中で考えることをやめさせないということである。進行役に対して「司会」という日本語ではなく、あえて「ファシリテーター (facilitator)」³という聞き慣れないカタカナ語を用いるゆえんである。

こうしてヨーロッパで生まれた哲学カフェであるが、日本で哲学カフェというイベントが広く知られるようになったのは、1996年、ソーテの著書『ソクラテスのカフェ』の翻訳出版と彼の来日がきっかけだと言われている。その後、大阪大学臨床哲学講座が哲学カフェを定期的で開催するようになり、同様の試みが全国に広がっていったのである (松川他 2014)。現在では日本各地で定期的で開催されており、興味がありさえすれば誰でも参加できるほどに、ポピュラーな催しとなりつつある⁴。

ただし私達の哲学カフェが、ソクラテスのやり方、そして従来の哲学カフェを踏襲していると言っても、そこには決定的な違いがある。というのも、ソクラテス達のやっていることが「知の探求」であるのに対して、私達はそうした探求そのものよりも、その手前の「問いをどうやって立てるか」に重点を置いているからである⁵。「自らが問いを發すること」は、「問題を与えられて、それに答える」ことに慣れてしまった日本の学生には、かなり難しいことである。それでも学生は、卒論を書かねばならない。自分でテーマを決めねばならない。そこで少なからぬ学生が、四苦八苦する。しかし本を読んでも、教師の話聞いても、いくらでも疑問は浮かぶはずである。何を扱っても「自分には分からない点」が必ずあるはずである。にもかかわらず、自分で問いを立てることができない学生がいる。彼らが自分で問いを發することができるようになるには、どうしたらよいのか。

1.2 本哲学カフェの狙い

「大学全入時代」ということが言われて久しいが、そうした中、学生の中に広がっているのが「問題発見能力の欠如」という病である。筆者達の経験上、この問題は、大学のレベルとは関係なくこの国の大学全般に広がっている現象である。本を読んで疑問点を挙げる。人の話を聞いて質問する。これらのことは、簡単にできそうだが、実はきわめて能動的 (アクティブ) な作業である。相手からの指示ではなく、あくまでも「自分から」考えることが必要なのである。私達が教科書を通して学ぶ知識は、すでに答えが確立されている「問いと答え」であって、それを受動的に学習するだけでは、問いの立て方は学べない⁶。「問いを立てる」技法は、「理解して終わり」ではなく、「分からないことを意識化し、そ

れに取り組む」ことを通してでなければ身につかない。

「問う」ことは、「問われる」ことによって意識される。教員が、学生の発言に対して次から次へと問いを発していけば、ほとんどの学生が、次に何が問われるのかを予想するようになる。つまり問いをあらかじめ想定できるようになる。筆者の一人である松井は、二十年以上も前から（講義という形式の授業であっても）必ず学生に問いを投げかけて、彼らから答えを引き出す作業を続けているが、それを続けていると、学生は自然に「次に問われること」を考えるようになる。自らが出した答えを批判的に眺められるようになるのである。

学生達にとってもう一つ重要な点は、不特定多数の人を前にして、自分の意見を述べる訓練の場が提供されるということである。近年の就職活動では、グループディスカッション等が課されることが増えているが、学生達は、議論の訓練をほとんど受けていない。議論を中心とするゼミもあるだろうが、それでも議論するのは気心の知れたゼミの仲間であって、不特定多数の人々と議論する機会は、きわめて少ない。私達の哲学カフェの場合、親世代と言ってもよい教員や、年長の学生、時には三十代のOBやOGが参加するので、そうした訓練には最適である。友達ではない人々と長時間会話することすら稀な学生達にとって、哲学カフェへの参加は、大学という狭い社会を出る最初の一步となる。

なお、参加する学生の中には、どうやって議論に加われば良いのか分からないと言う者や、考えているうちに話題が変わってしまって発言の機会を失ったと言う者が少なくない。そうした中でうまく議論に加わることも必要な訓練なのであるが、多様な意見を出し合うという意味では、彼らからも発言を引き出す必要がある。そこで本計画では、休憩時間にタブレットやスマートフォンを使って、（この企画のために準備した）ネット掲示板に質問や意見を書き込んでもらうようにしている⁷。

哲学カフェの第二の目的は、専門分野を異にする教員同士が、いわば素人の立場に戻って互いの話に耳を傾け、知的な刺激を与え合うということである。毎回の哲学カフェは、一人の教員が関心を持っているテーマについて短く話をし、それをきっかけに議論を進めるといった形を取っているが、多くの場合、他の教員は、そのテーマについて素人である。私達は、できるだけ身近なテーマを選んでいるが、それは、講義のように専門的な知識の習得ではなく、問題意識を深めてもらうことが目的だからである。私達が、できる限り「最初から最後まで普段着の思考をする」ことに腐心しているゆえんである。そしてそのためには、専門の異なる学者が多い方が良い。教員といえども、専門が異なれば知識の上では素人同然であり、専門用語が飛び交うことにはならないからである。

さらに、今日、総合大学と称される大学は多いが、そうした総合性のメリットを生かし切れている大学は、そう多くはない。様々な学部・学科を抱える大学といえども、そうした多様性を教員同士が共有し、自らの研究・教育に活かすことは難しいのが現状である。もちろん現代では、研究分野の細分化が進んでいるため、異分野からの刺激を取り込む余裕がない学者も多い。それ以前に、自らの研究と関連があるものにだけ興味を示す学者も少なくない。しかし、もしそれでよいのであれば、組織として一つであること以外に総合大学であることの意味は見出されない。幸い私達が属する人文学科の場合、同じ学科内に

まったく異なる分野の専門家がいる。普段なら互いの専門や問題意識に関心を持つことはないし、ましてや個人的な場で議論をしたりすることはない。ところが哲学カフェという場を設定すると、そうした垣根が簡単に取り払われるのである。

しかも哲学カフェは、「カリキュラム」ではない。それは、教員の参加がボランティアであることから分かる通り、私的な面を持つ。「カフェ」という名が示す通り、それは、お茶を飲みながらの集まりであり、肩書や立場を気にする必要のない談話会（サロン）なのである。とはいえ、学者であれば誰でも経験することだろうが、学会での議論よりも、その後の懇親会でカジュアルにかわされた会話の中から重要なアイデアが生まれたり、より本質的な議論が生まれたりすることがある。そこでは、まだ萌芽状態にあるアイデアがかわされたりするのであるが、まさにそれゆえにそうしたやり取りは、発想の宝庫となる。私達教員が、哲学カフェに自発的に参加するのは、この集まりが自らの知的好奇心を大きく揺さぶってくれるからなのである。

こうして教員同士が知的な交流を深めると、それは学生の指導にも好影響をもたらす。本学人文学科の場合、卒論にアカデミックなテーマを選ぶ学生は少なく、多くは身近なテーマを取り上げることになるのだが、そうしたテーマを掘り下げる場合、（それがアカデミックなものでないだけに）多様なアプローチが可能である。つまり様々な専門の教員のアドバイスを受けて論文を書くことができるはずなのである。しかしそれも教員同士の知的交流があれば簡単であるが、なければ途端に難しくなる。教員同士の知的交流は、確実に教育的効果を上げることができるのである。

教員が互いの意見を戦わせたり、他の教員の意見に感心したりするのを見れば、学生は、そこから色々なことを学ぶ。教員の意見が対立しているのを見れば、教員の語るものが絶対的なものでないことが分かるだろうし、知識を得ることが喜びを生み出すのを目の当たりにすることにもなる。それは、学問が生まれる場所に立ち会うという経験であり、結果的に学問に対する敬意を生むことにもつながる。こうしたことに加えて、そこで学生は、自分があまり関わったことがない教員の普段の顔を知る。そもそも多様な教員との関わりは、学生の関心の幅を広げ、確実に学習上のメリットとなるのだが、哲学カフェに参加すれば、それだけで異なる分野の教員数名と知り合うことができる。持続的に参加すれば、教員とのつながりは自然と深まり、個人的な指導も受けやすくなる。教員もまた、そうした学生に対しては、指導がしやすくなる。こうした機会を増やせば、教員と学生の間にある垣根は確実に低くなるのである。

1.3 これまでの「哲学カフェ in 有瀬」

本計画による哲学カフェは、2015年11月から2016年度末までに計十回開催されているが、本論はその「狙い」に焦点を絞っているため、ここではその現状について、参加者や会の形式について簡単に記しておく。まず参加者であるが、本論の著者五名は、ほとんどの回に参加している。それ以外に、トータルで見れば、人文学科教員八名、経済学部教員一名、本学元教員二名が参加している。現役学生の参加者数は、最も少ない回で六名、多い回では二十名を超える。これらに加え、卒業生や、学外からの参加者（本学参加者の

知人などである) などがいるので、全体の人数は、最も少ない回で九名、多い回では三十名にもなる。開催時間は、カリキュラムと被らないようにするために、主に土曜の午後（場合によっては日曜の午後）、三十名定員のゼミ教室を使って開催している。一回の哲学カフェは、前半一時間半、後半一時間半に休憩を三十分はさむというスタイルである（この休憩時間に、タブレットやスマートフォンを用いて自由に意見を書き込んでもらうようにしている）。これまでに設定されたテーマは、「働く」「ライブが生み出すもの」「名画ってなに?」「愛って?」など、街中で開催される哲学カフェと同様、カジュアルなものが選ばれている。毎回、まず提題者がテーマについて話のきっかけとなるようなことを十五分程度話し、その後、議論に移る。参加している学生が多い場合は、提題の後、小グループに分かれて話し合ってもらい、それを全体で再度共有するという形式をとることもある。なお、私達の哲学カフェでも、自己紹介などはしない。哲学カフェは、建前上、あくまでも「不特定多数の参加者同士による議論」でなければならないからである。

2 キャリア教育の視点からコミュニケーション能力と哲学カフェの関係を考える

2.1 非定型業務を担う正規雇用社員に求められるもの

雇用が不安定である、低賃金である、手厚い教育や訓練を受けられず能力を伸ばすチャンスに乏しいなど、非正規雇用の雇用条件が正規雇用と比べて圧倒的に不利であることを考えると、特別な事情がない限り正規雇用社員（以下「正社員」）を目指すのが順当である。では、正社員と非正規雇用の仕事の違いはどこにあるのか。

1995年、日本経済団体連合会（以下「日経連」）から『新時代の「日本的経営」－挑戦すべき方向とその具体策』が発表された。ここで日経連は雇用を「長期蓄積能力開発型」、「高度専門能力活用型」、「雇用柔軟型」という三つのタイプに分けることを提言した。バブル経済崩壊により景気の長期低迷に喘いでいた産業界はこの提言を取り入れた。それによって雇用の流動化が進み、今日では、賃金労働者の約4割が非正規雇用となっている。今日、一般化している雇用形態に当てはめれば、第一のタイプは正社員、第二は専門知識を持った任期付社員、第三はアルバイト、派遣社員などであろうか。このことから分かる通り、非正規雇用社員が行う仕事は代替可能な定型業務が中心である（しかも、今後こうした仕事の多くは、AIに取って代わられる可能性が高い）。一方、正社員の仕事は、非定型業務、すなわち課題を発見し、会社の人的・物的資源を用いながら解決策を見出し達成へ導くような仕事など、前例が乏しく一筋縄ではいかないものが中心である。このような定まった形のないものを形にしていく仕事には、創造力がまずもって必要である。正社員は、自らも創造力を発揮しながら、集団として創造的なアウトプットを出し続けることを求められる。それはただ漫然とひとを集めてできるものではない。「創発はデザインするものプロデュースするもの」（加藤 2015, p.162）であり、それを担うのが正社員なのである。

2.2 「対話」が「閃き」を生む

さて、創造は「閃く」ことから始まる。いつ訪れるかわからない属人的な行いである閃きを促すために、さまざまな集団によるアイデア発想法が考案されている。その中で一般に普及している「ブレインストーミング」を取り上げ、非定型業務で求められるコミュニケーション能力について考えてみたい。ブレインストーミングとは、テーマを設定し五～十名程度の参加者が自由な雰囲気の中で思いつくままにアイデアを出し合う、グループによるアイデア発想法で、1939年アメリカのBBDO広告会社の副社長 A.F. オズボーンが考案したものである。斬新なアイデアが常に求められている広告業界では、定番の発想法として古くから取り入れられている。筆者の一人である桑島が広告制作に携わり始めた1980年代初頭には、毎日のように社内でブレインストーミングが行われていた。その後、ビジネス界にソリューションビジネスが増えるに従って、ブレインストーミングもビジネス界全般に普及していった。今日では教育界においてもグループ学習などで用いられるようになっており、今やアイデア創出の場面では欠かせない発想法となっている。

ブレインストーミングには「批判禁止、質より量、自由奔放、結合便乗」という4つルールがある。これを仔細に眺めてみると、ブレインストーミングが対話的な性質を持つ発想法であることがわかる。一般的に「議論」は結論を求めるために行うものである。それに対して「対話」(ダイアログ)は「さまざまな人の意見に耳を傾けそれを掲げてどんな意味なのかよく見ること」(ボーム 2007, p.79)であり、内容の優劣を問わない。上記のルールでは「批判禁止」がこれに相当するだろう。また、多様な意見をそのまま陳列するという意味で、「質より量」と「自由奔放」にも共通する。対話では「相手の言葉を受け止め、自分なりに理解した上で、感じたこと考えたことを言葉にして返す。そして相手も同じように返す……」というやりとりを繰り返す。これは「結合便乗」(他人の意見と自分の意見を自由に結合したり、他人の意見に便乗したりしても良いということ)と同意である。

社会的な構成物は、人々の社会的コミュニケーションによってつくられたものである。にもかかわらず、人々はそれを意識しないために誤解や混乱が生じる。そこで、人々が相互理解を深めるために、物事を意味づけていくコミュニケーション行為が大切となるのだが、そうした意味づけを創造・共有していく効果的な方法が「対話」なのである(中原・長岡 2009, p.87)。なにかひとつの物事について他者と語り合うと、他者による意味づけが自分と異なっていたりすることがある。異なった意味づけに出会うと、自己の意味づけがゆらぎはじめる。語り合いを続行し、自己が行った意味づけと他者のそれとを行き来するうち、自分や他者の意味づけの背後に隠れていたものが現れる。それが新たな意味づけをされて新しいアイデアとなる。これがブレインストーミングの本質である。新たな意味づけが弾みとなって対話が活性化し、次々に新たな意味やアイデアが紡ぎ出されていく。

2.3 対話する力を育む場

ブレインストーミングのルールが示唆するように、創造力を生み出すために必要なコミュニケーションは「対話」である。にもかかわらず、結論を求めない「対話」は、目に見える教育効果が求められる正規科目となじみにくいからか、大学教育の中で磨く機会は

決して多いとは言えない。ソクラテスの時代より、対話は哲学的思考には欠くことのできないものである。哲学カフェで行われるコミュニケーションは、結論を求めない対話である。対話を通じて多様な見方や考え方に会い知的刺激を受ける。そして、さらなる対話を通じて新たな見方や考え方が生まれ、参加者のものの見方や考え方が更新されていく。このようなプロセスを延々と繰り返す中で、参加した学生は結果を求めない対話の有用性に気づき、自分なりの対話法を体験的に学習していくのである。

3 大学における哲学の講義あるいは演習と哲学カフェ

3.1 参加者としての立場 — 教員と一個人のはざままで —

本節では、哲学カフェと大学カリキュラムにおける哲学教育との比較検討を、参加教員の一人である平光の実践例を通して行う。平光は哲学を専門とする教員である。

大学での講義や演習において、平光は教員として授業を行う。教員は、教室という同一平面に学生とともにありながらも、権力関係において、知的能力の程度において、突出した位置を占める。特に講義においては、教員は講義主題に即した議論を、ほぼ自作自演で展開する。教員は、主題について学生に説明し、語りかけ、板書をし、問いかける役割を担う。学生はまずは聴衆である。

哲学カフェにおいて、平光は一個人としてその場に参加する。提題者あるいはファシリテーターを担う場合はまた異なるが、一参加者としては、学生に対して教えるべきことを何も持たず、ともに主題を探求する個人である。学生も聴衆ではなく、同じ資格の個人である。しかしこの点に、大学で行われ、また教員が複数名参加する、哲学カフェの難しさがある。教員の側としては、他の参加者である学生と同じ資格で集まった一個人のつもりであっても、学生にとってそうではない。彼らにとって平光は依然「哲学」の「教員」である。そのため、平光が哲学カフェで語る内容は、他の参加者から一定の「正統的」な理解、「権威ある」見解と見なされる可能性がある。その場合、話の内容に対する異論や反論、あるいは批判が、あらかじめ彼らのなかで封じられている可能性がある。そのため、平光としては、可能な限り発言を控え、むしろ他の参加者の発言を促すことを旨としている。参加者のなかには、活発に自らの考えを述べ、あるいは反論を展開する者もある。しかし、思っていることを人前で口に出して言うことを苦手とする者もあるだろう。そうした学生であっても、哲学カフェに来るということは、何か話したいのかもしれない。哲学教員が個人として参加する意義は、そうした学生を見つけ、発言を促し、思考を展開する支えとなることにある。

3.2 講義と哲学カフェとの主題展開の違い

哲学の講義における主題の展開は、例えばデカルトを論じる場合には、デカルトの問題意識からはじまり、彼による方法的懐疑と省察の内容がそれに続き、ひとつの頂点として cogito ergo sum の発見にいたり、さらにこの命題とともに世界観が転回する、というように進む。ここではひとつの問いが一貫して展開され、深化される。またここには知の一

般性が成立する。つまりデカルトの思索について、学生が共有すべき一般的理解が成り立つ。

哲学カフェにおいては事情が異なる。平光が提題を行った際、その主題であった「働く」について、教員として教えるべきことを何も持たなかったし、そのつもりもなかった。哲学カフェは、哲学と哲学史の知識を学生に伝える場ではなく、学生の理解度を評価する場でもない。むしろ彼らが素手で問いと格闘し、自ら考え始め、考えを表明することに主眼がある。そのため、提題においては、哲学や哲学史の知識を何も前提せず議論できるように、話を作成した。むしろ「人生哲学」的に、一個人として人生のなかで出会ってきた「働く」ことに対する疑問や考えを述べた。もちろん働くとは何かを問い、この問いに対して通常なされる言説を転回するような論点を中心とした上でのことである。ただこの問いと論点とを、個人として思ってきたことを通して語った。それは、提題後の議論のなかで、他の参加者自身が働くことについて考えてきたことをもとに、論点を考えて欲しかったからである。

しかし、その結果は散々なものであった。「働く」という主題について提示した問いや論点はほぼ見過ごされ、参加者は個人的な思いを散発的に羅列することに終始していた。主題について参加者と共同でなされるような一貫した探求は成立せず、議論はかみ合いもしなかった。参加者たちの議論は、提題者あるいは他の参加者の言葉の一部に刺激されて、ひたすら横滑りしていった。ただ、この状況は開始第一回目のことであり、少なくとも様々な言葉を学生たちが自ら紡いでいったことに、成果をみるべきかもしれない。

3.3 演習における質疑応答と哲学カフェにおける議論

授業としての演習では、哲学のテキストあるいは学生の研究に基づいた発表が行われる。それに対して演習参加者全体で質疑応答を行う。平光は教員として参加するが、中心となるのは発表者であり、また質疑応答を行う演習参加者である。この点で哲学カフェは演習に類似している。演習の場合、教員として発表に対する他の学生の発言を促しはするが、全体の進行は学生たちの自主性に委ねられる。教員が学生たちに先立って発表に対してコメントすることは可能な限り避ける。それは、教員が先に発言することで、学生たちが自ら気づき、考え、言おうとしていたことの芽を摘むことになりかねないためだ。時に無言の状態が続くこともあるが、それに耐え、付き合っていくことで、次第に学生たちは自分から口を開き始める。また、発表に対して教員としての見解を付す際には、その指摘や疑問は「先ほどの〇〇くんの指摘にあったように……」、「□□さんの質問は本質的で……」など、学生たちのやりとりを再び取り上げながら行う。これを繰り返すことで、自らの発言を取り上げられた学生は、自らの着眼と考察に自信を深め、一層自ら思考しつつ発表を聞き、問題を追及することができるようになる。

哲学カフェへの平光の関わりは、特にファシリテーターを担う場合には、演習におけるこうした態度と重なる。まず、提題者が展開した議論を下敷きにして、カフェ参加者たちの発言に耳を傾ける。そして、提題の論点と本質的に関わり、それを問い直すことになる発言が見られた場合にのみ、その発言を引き取って述べ直す。さらに、その発言に対する

提題者からの応答を促し、再びそれを発言者へ差し戻すことで、論点について踏み込んだ質疑応答ができるよう努めている。しかし、こうした機会は、演習と比して非常に限られたものである。哲学カフェの場合、提題者の展開した論点に対し、議論が集中することは稀である。一言で言えば、そこには中心がない。仮に議論の焦点が、提題者と発言者とのあいだで一瞬成立したとしても、あるいは成立させたとしても、次の発言者によって、議論は絶えず横へずらされていく。これはこの哲学カフェの性格上、避けられないことかもしれない。この哲学カフェでの議論は、提題者の主題に対する質疑応答によってではなく、話題に刺激されることで生まれた、参加者の思いの発露によって、つながっているからである。この点にこの哲学カフェの面白さもあるし、またつまらなさもある。

以上、三つの観点から、大学における哲学の講義あるいは演習と哲学カフェの対比的考察を行ってきた。哲学カフェの現状は、カフェとして見るならば、十分活況を呈しており、参加者の多種多様な語りとそのリレーの場として充実しているように思える。しかし、真理探求の共同的な場という方向性においては、すなわち哲学として見るならば、この対比によって浮上した諸困難は、課題として受け止める必要があるだろう。

4 大学で哲学カフェをやるということ

現在、神戸学院大学で行っている「哲学カフェ」の目的は、学生に対しての教育効果と教員の相互理解並びに知的好奇心の活性化である。本稿ではフランスのやり方を元に、現在日本で「哲学カフェ」を定期的で開催しているカフェフィロと本校との違いに注目する。両者の特徴を比較することにより、大学で「哲学カフェ」を行う意義を明らかにしていきたい。

4.1 カフェフィロ主催「なぜ私たちは哲学するのか？」に参加して

カフェフィロは「哲学カフェ」をはじめとする街中での哲学対話の実践やサポートを行う集団（任意団体）である。2005年に発足後、全国各地で「哲学カフェ」を開催し、日本で行われている哲学カフェの代表といっても過言ではない。そこで筆者の一人である金は、2016年7月31日（日）に岡山大学まちなかキャンパス「城下ステーション」で行われた「哲学カフェ」に参加した。この日は「なぜ私たちは哲学するのか？」というテーマで、参加者は二十五名であった。

その日は、「哲学することと考えることってどう違うのか？」という問いかけからはじまり、「哲学とは何か」をめぐる、大きく二つの問題が浮かび上がった。ひとつは、哲学と他の「考える」や知のあり方との関係で、「哲学する」は「考える」の一部なのかということ。二つめは、複数の哲学の区別について。そこでは、「哲学や倫理は社会や人生のベースにある大事な問題について考えることだから必要」という意見がある一方で、「それもわかるけど、私は必要だからというより、単純に楽しいから哲学カフェに参加している」という意見も出た。

最終的には、「哲学はグラデーション」という言葉が出てきた。「思う→考える→思考す

る→哲学するという流れで哲学が存在するのではないか」という意見から「感想と哲学は違う」ことや、「哲学は能動的である」ことなどがその理由として挙げられた。

カフェフィロ主催の「哲学カフェ」は、個々人の生活に基づいた発言が多く、「暮らしや人生との関わりのなかで哲学がどうあるか」ということを中心に展開されていた。それは今までの経験のなかで、自らの哲学を持っている、だからこそ日常生活のなかで哲学を見いだせる参加者が多かったからではないだろうか。大学で行っている「哲学カフェ」との大きな違いは、意見を出すことに活発だった参加者の姿勢である。「このことに関して誰か意見があるひと」という進行が中心の大学の「哲学カフェ」に比べて、挙手が重なるからそれをバランスよくあてていくというのが進行役の主な努めであったことからそのことがうかがえた。

4.2 大学で「哲学カフェ」を行う意義

上で述べたように、大学のそれと比べて、カフェフィロ主催の「哲学カフェ」は非常に白熱したものであった。社会人の参加者が多く、彼らは休日に時間を作って出向いてきた人達である。それは、前述した「哲学は能動的である」ということとつながっているのではないだろうか。確かに学生も単位のためや先生に言われたからというよりは、多少能動的に大学で行っている「哲学カフェ」に参加しているわけだが、その奥にあるものは「楽しみたい」というより「楽しませてほしい」、「何かを得てみせるぞ」というより「何かを得たい」という姿勢である。

しかし逆に考えると、大学で行うからこそ彼らは「哲学カフェ」にやって来るのだ。これが街角のカフェで行われていたら、日本の大学生は「なんとなく」参加できるだろうか。フランスで偶発的に始まった「哲学カフェ」は、カフェであるからこそ敷居が低くなり、広まった。一方で、日本の場合（特に若者の場合）は大学という安全で自分を傷つけない場所であるからこそ敷居が低くなる。

また、積極的に発言するひとが多く、挙手が後を絶たない他の「哲学カフェ」に比べて、能動的な参加者が少ない大学のそれは「聴く力」を養う場にもなっている。話すことに慣れていない学生の意見を「聞く」というより「聴く」。同級生のたどたどしい話や、自分語りにも耳を澄ませる。それは話すことや考えることより能動的な力を使わなくて済むので、多くの学生は最初「聴くこと」に徹している。そして、一見受動的に見えるその行為は、実はその後の「言葉で伝えること」「考えること」につながっていく。

つまり、大学で行う「哲学カフェ」の意義は、哲学の敷居を低くし、「聴く力」→「伝える力」→「考える力」を順番に養っていけるというところにある。

従来の「哲学カフェ」は、意見を出し合うことで日頃考えていることが広がったり深まったりするところにその意義がある。

大学で行う「哲学カフェ」は、日頃から物事を深く考えているひとが、今まで考えてきたことを話す場所ではない。参加する学生は、まずは「聴く」ことを通して、次に自分でもよくわからないなりに「話す」ことを通して、日常のなかでぼんやりと思っていることを考えられるようになる。

つまり彼らは、“学びながら生きるひと達”なのである。考えを話しに来ているのではなく、来ることで考えるきっかけを持って帰っていく。

大学で「哲学カフェ」を行う意義は「考えることのきっかけやはじまりをつくる」ということではないだろうか。

5 「科学」を議論する場としての哲学カフェ

5.1 哲学カフェとサイエンスカフェ

1992年に開始された哲学カフェに続くようにして1998年、イギリスやフランスで「サイエンスカフェ (Café Scientifique)」が開始された。サイエンスカフェは、科学技術の専門家が非専門家との対話を行うもので、基本的には哲学カフェと同じコンセプトであった(松田 2008)。つまり、どちらもそれぞれの学問に関する専門家が非専門家とつくるコミュニケーションの場といえる。

しかし今日のサイエンスカフェは、特に日本では明らかに政治的意図を含んだ活動となっており、背景に、日本学術会議を通じた政府および研究者コミュニティの科学技術アウトリーチ活動⁸の取り組みが大きく関わっている。日本でのサイエンスカフェは、2006年の科学技術週間に全国二十一ヶ所で開催されたことで大きく認知を広げた。これは前年度の科学技術白書にイギリスのサイエンスカフェが紹介され、日本学術会議でアウトリーチ活動としての有効性が合意されたことによる(松田 2008:長谷川 2008)。同時に2005年から2009年には文部科学省からの委託事業として、東京大学、北海道大学、早稲田大学の各大学院で科学技術アウトリーチを担う人材育成が行われた。北海道大学の科学技術コミュニケーター養成ユニット (CoSTEP)はこの期間中に三百人以上の修了生を輩出している。

このように日本のサイエンスカフェは、アウトリーチ活動の一環として広がったといえる。これには地球規模の環境問題(地球温暖化や気象災害など)に対する正しい知識の普及や啓蒙を「より効率よく行いたい」という科学者コミュニティの意志が強く働いたとみられる。

5.2 アウトリーチ活動としてのサイエンスコミュニケーション

筆者の一人である福島は気象・気候学のため、気候変動関連研究のアウトリーチ活動を間近に見てきた。大学教員の多くは2004年の国立大学独立行政法人化などで事務手続きなどが煩雑化し、負担が大きく増えたが、アウトリーチ活動はそれに加え新たに課せられた業務であった。具体的には高校生や市民に向けた講演会の実施や各種メディアの取材対応などである。必ずしも自分の研究内容を話すわけではなく、より一般的な知識や、話題の別の研究者の研究内容の説明などが期待される。「最先端の内容」を「わかりやすく説明」することが求められるが、具体的なノウハウや手助けはなく、試行錯誤しながらも準備から実施まで全てを行わねばならない。したがってアウトリーチに積極的な教員は少なく、メディアに関しては一部の「説明上手な」研究者のみを露出させている印象すら

ある。

一方、学生時代からアウトリーチの重要性を教育されてきた若手の間では、活動そのものに高い関心を示す者も現れつつある。2011年から2013年に三回開催された「気象気候若手研究者交流会」に集まったのはそのような若手達だった（川瀬他 2011）。初回に「研究者からメディアや市民に何を、どうやって発信したいか」という観点での議論があり、第3回にはアウトリーチと科学コミュニケーションをテーマに、メディアに頻繁に出演する研究者や気象キャスターを招いて議論をしている（釜江他, 2013）。

こうした会に出席して驚かされることは「テレビに出て（研究の）話をするのはカッコイイ」と思っている若手が少なからずいることである。アウトリーチ活動は名誉なことで、成果を上げた人間のみが許される行為と感じていた。これはこの分野の特殊な立場、つまり非研究者の気象予報士や気象キャスターが市民への窓口になっている現状と無縁ではないだろう。参加者の多くは大学院生や研究員、ポスドクで、職務上、アウトリーチの経験は少ないと考えられる。一方で自身の研究成果が社会に何らかのインパクトを与えているという社会的欲求をアウトリーチ活動から得られる、と考える前向きな意見ともいえ、自身の未来に野心や希望を抱く若手研究者らしいといえるかもしれない。

しかしながら「自分の研究成果を世の中に知らしめたい、人々の理解を得たい」という欲求は、サイエンスコミュニケーションが目指す先、市民が科学について闊達に議論できるという趣旨から離れてはいないだろうか。研究者側がサイエンスコミュニケーションを「自身の研究に関する社会への説明責任」と考えれば、対話という双方向性が欠落してしまうのである。これはサイエンスカフェがアウトリーチ活動に置き換えられたことで導かれた結果であり、残念ながらこのようなアウトリーチ活動は、サイエンスカフェの名を冠したまま、おそらく今後もサイエンスコミュニケーションの中核的役割を担っていくと予想される。

5.3 サイエンスコミュニケーションの原点回帰としての哲学カフェ

福島は、2012年より現職で自身の専攻と異なる大学生に講義を行い、出前授業や講演会等によって高校生や市民と接し、また日常的に異なる分野の教員らと対話をしている。これらの経験を通じ「アウトリーチとは、研究コミュニティに属するすべての人間が、身近な人々と日頃から行っていく”対話”であるべきではないか」と強く感じている。さらに市民が（専門家がおらずとも）科学についてあれやこれやと議論を交わすようになることが、本来目指すべきサイエンスコミュニケーションの姿ではないかと考えている。今日の「研究内容の普及のためのアウトリーチ」は主に講演で成り立っており、非専門家の参加者はいつまでたっても意見を言うことができない。これでは「自分ごと」として科学を考えることにはつながらないのではないか。

こうした状況の中では、本稿のような取り組みが、国内のサイエンスカフェのありかたに一石を投じることになるだろう。哲学カフェでは哲学的素養や手法が非専門家の間に広がることを目的とするが、そこで扱うテーマは、ある程度の広がりや許容する懐の広さがあり、科学を議論することもできる。ここではより参加者が発言しやすいため、既存のサ

イエンスカフェの内容から新たに対話を生み出し、失われていた双方向性を回復できるのではないかという期待が持てる。さらに科学者達は哲学の非専門家であることから、肩書きという重荷を降ろすことができ、自由闊達な議論で、ほかの参加者達に「柔らかな科学観」（釜江他 2013）を示すことができるのではないかと考えるのである。

6 最後に

冒頭でも述べたように、本企画は、参加教員ならびに学生の「自発的な」集まりである。一般の哲学カフェと同じく、参加した学生は自己紹介もせず、議論を始める。そこでは、教員も含め、各人の立場は捨象される。哲学カフェは、教員にとっても自分が試される場所なのである。しかし、そういう自由に議論ができる場であることが、哲学カフェの核心である。ここまで各教員がそれぞれの立場から哲学カフェの意義を考察してきた訳だが、どの議論も哲学カフェのもつ「自由さ」に注目していることは偶然ではない。現代の学生達は、あまりにも多くの「強制」に縛られている。彼らは、「考える」前に「考えさせられている」のである。そうした強制は、少なからぬ若者にとって、思考に喜びを与えるどころか、苦しみである。私達の哲学カフェは、できる限りそうした強制から自由でありたいと願っている。本物の思考は、自由の中からのみ生まれる。哲学が古代ギリシャの民主主義社会から生まれたゆえんである。こうした思索の自由さを取り戻すために哲学カフェが果たす役割は、決して小さくないのである。

注

- 1 この五名は、2016年度神戸学院大学教育改革助成金「哲学カフェとBIGPADによる学生の「問題発見能力」・「発信力」の向上ならびに教員ネットワークの活性化」という計画の参加メンバーである。したがって本論文も、この助成金によるものである。
- 2 ソクラテスが自らの仕事を「(精神的な)産婆術」と考えていたのは有名であるが、この最高の哲学者は、哲学という営みが教育と直結すると考えていたのである。
- 3 facilitator は、facile（「容易な」を意味するラテン語）から来ている言葉で、原義的には「事柄を容易にする者」であり、そこから「(議論を)促す者」「進行役」という意味を担うようになった。
- 4 「カフェフィロ (cafephilo)」と検索すれば、現在日本各地で開催されている哲学カフェの情報が手に入る。もちろん、そこに掲載されている以外にも多数の哲学カフェが開催されているはずで、それらを含めるとかなりの数の哲学カフェが存在するのは間違いない。なお、「カフェフィロ」とは、大阪大学臨床哲学講座が母体となって生まれた任意団体であるが、そこが開催する哲学カフェに参加した上で、本学の哲学カフェとの違いを論じているのが第4章である。
- 5 その結果、「哲学カフェ」という名前に引き寄せられて参加した学生の中から「一つの問題を哲学的に深く掘り下げて欲しい」という要望が寄せられることになる。これは、至極もったもな要求なのであるが、残念ながら現時点では、その要望を十分に満たすことはできていない。この点については、本論第3章を参照。
- 6 日本の教育現場では、問いに対して一直線に答えを出すことが良いこととされている。確かにそれが一番「合理的」なのであるが、それは真理を探究する現場においては、あり得ない話である。一

般に科学はそういう合理性を追求していると思われがちであるが、その営み自身は、試行錯誤の連続である。そういう科学の特質を社会が理解することこそ、科学が望むことであるはずである。こうした科学理解の場に哲学カフェを利用しようというのが、本論第5章である。学問というのは「試行錯誤」の積み重ねであって、数多くの失敗の果てに、運が良ければ一つの成功が手に入るといった営みなのである。他方、現在の日本では、そうした「間違っているかも知れない、失敗するかも知れない試み」を評価しようとする傾向は、ますます弱まりつつある。すべてがいわゆる「成果主義」という一語で評価されるのである。こうした傾向は、学問が経済的効果といった基準で測られることの当然の帰結なのであるが、それが、この国の創造力を高めることに本当に寄与しているのかどうか、アカデミズムのみならず、社会全体が考えてみるべきである。今日の産業界が求める創造性を促す場として哲学カフェを捉えてみようというのが、本論第2章である。

- 7 掲示板(「哲学カフェ in 有瀬」)URL は、<http://6810.teacup.com/cafephilo/bbs>. ただし、この掲示板は、あくまでも補助的なものである。議論の訓練ということ言えば、発言はすべて他の出席者の前ですることが望ましいからである。また学生が活発に発言した回では、掲示板への記入も少なくなるので、掲示板への書き込みが当日の議論を集約しているとも言えない。
- 8 文部科学省によれば、アウトリーチとは「国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め、かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため、研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション活動」と定義される活動のことをいう(平成17年6月7日開催の学術研究推進部会(第10回)配布資料より)。

参考文献

- [1] ボーム, デヴィッド, (2007), 『ダイアログ 対立から共生へ, 議論から対話へ』(金井真弓訳), 英治出版.
- [2] 長谷川寿一, (2008), 「サイエンスカフェ — その効用と課題」, 『学術の動向』, 13/7, 28-31.
- [3] 釜江陽一他, (2013), 「第3回気象気候若手研究者交流会～若手の視点からアウトリーチ・科学コミュニケーションを考える～」, 『天気』, 60, 681-690.
- [4] 加藤昌治, (2015), 『発想法の使い方』, 日本経済新聞社.
- [5] 川瀬宏明他, (2011), 「若手連携の土壌作り～気象気候若手研究者交流会の立ち上げ～」, 『天気』, 58, 269-273.
- [6] 松田健太郎, (2008), 「日本のサイエンスカフェをみる:サイエンスアゴラ2007でのサイエンスカフェポスター展・ワークショップから」, 『科学技術コミュニケーション』, 3, 3-15.
- [7] 松川絵里他, (2014), 『哲学カフェのつくりかた』, 大阪大学出版局.
- [8] 中原淳・長岡健, (2009), 『ダイアログ 対話する組織』, ダイヤモンド社.
- [9] ソーテ, マルク, (1996), 『ソクラテスのカフェ』(堀内ゆかり訳), 紀伊國屋書店.